

張学良少帥と日本

儀我 壮一郎

目 次

- I 満洲と満州
- II 満洲と張作霖・張学良政権
- III 張学良の2つの「9月18日」
- IV 「満洲事変」と張学良
- V 「満洲帝国」の「理想」と現実
- VI 西安事変をめぐる
- VII 張学良の人間模様
- VIII 結 言

I 満洲と満州

現在の中国東北部の遼寧省・吉林省・黒竜江省に当たる地域の歴史は古い。先秦時代の古典によれば、肅慎がいたといわれ、戦国時代には漢族がこの地域の南部に進出、漢魏時代には郡が置かれた。このためツングース系の貊（ばく）人の中から西暦前1世紀～後5世紀にかけて夫余（国と部族の名）、1世紀頃高句麗王朝が興り、挹婁（ゆうろう）勿吉、靺鞨（まっかつ）が活躍したが、その後、7世紀末から10世紀初頭には渤海（ほっかい、唐の制度・文物を摂取）が建国。契丹（きったん）が、927年にこれを滅ぼした後、12世紀に女真（ツングース語系の民族）が金を建てた。13世紀に金がモンゴル（元）に滅ぼされた後、この地域は明の支配するところとなった。しかし、17世紀初頭、女真が再びこの地域を支配し、国号を後金とし、奉天（後の遼寧）・吉林・黒竜江の3省を東三省と呼んだ。この時期にこの地域がはじめて「満洲」と呼ばれるようになる。

まず、「満洲」の表記について問題点を見よう。「満洲は、地名ではなく民族名であり、そして国名でもある。したがって、一般名詞の州ではなく洲が正しい。満洲は、清朝を興したアイシンギョロ・ヌルハチ（愛親覚羅努爾哈赤）が、自国を『満珠（マンジュ）』と称し、民族名を『女真^{じょしん}』から『満珠』と改めたことに始まる。これがいつの間にか満洲として地名としても使われるようになり、『満州』と簡略化されていったのである。／ヌルハチが歴史のなかに登場するのは1583年だというから、豊臣秀吉が天下統一を成し遂げる時期に当たる」（小林英夫「Q & Aで学ぶ満洲と日本の歴史」『歴史読本』2009年9月号、214頁）。

当初、満洲は清朝発祥の地として何人も立ち入ることのできない封禁の地であったが、清朝は、1644年以降、漢族の移民を奨励し、1900年頃には、「東北の漢人の人口は1700万人近くに達したのである」（小林英夫『満洲』の歴史』講談社、17頁）。

清朝は、アヘン戦争（1840-1842）における敗北以後、太平天国から孫文の「滅清興漢」の辛亥革命にいたる「内憂」と英・仏・独・露・日などによる軍事的・政治的侵攻すなわち「外憂」によって半植民地的状況となり、しだいに衰亡に向かった。1900年、「義和団」が、北京の列国公使館を包囲し、清朝が列強に宣戦、八ヶ国連合軍が北京を占領。その際、3万6000名の連合軍の主力は、2万2000名の日本軍であっ

た。1901年の「北京議定書」(辛丑和約)によって日本は北京周辺の駐兵権を獲得し、華北侵略の拠点とした(1937年の「盧溝橋事件」)。

満洲の地では、20世紀に入って帝政ロシア(後にソ連)、大日本帝国の角逐があり、国民党軍と人民解放軍との戦闘が行われるなど、目まぐるしい軍事的・政治的变化がある。大清帝国、帝政ロシア、張作霖・張学良政権、大日本帝国、国民政府が、敗者となり、現在の中華人民共和国の建国(1949年10月1日)にいたる。—未里周平『満洲の落陽 敗者たちの記録』文芸社、2008年参照)。

Ⅱ 満洲と張作霖・張学良政権

張学良の祖父張永貴は、河北省河間府大城県の出身であったが、清の道光初年、息子の張有財とともに、遼寧省海城縣西小洼村に移り住んだ。その後も住所は転々とする。

張有財は正業に就かず、賭場で撲殺される。張有財は先妻邵氏の死後、王氏を妻としていた。長男作泰、次男作孚に続いて、1875(光緒元年)年、三男作霖が生まれた。張作霖14歳の時、父張有財が殺害されたのである。

1895年、張作霖は趙氏を妻とし、最初の子は夭折するが、1898年、長女首芳が生まれた。張作霖は、盧氏とも結婚するが、1901年6月4日、趙氏が長男学良を生んだ。馬車で移動中の出産であった。張作霖が、順調に部下の戦力の増強に成功している時であったので、学良の乳名は「双喜」とされた。この頃、張作霖は張景惠(1871-1959、後に「満洲国」総理)の援助・協力を受け始めていた(張永濱・李毅『張学良伝』黒竜江人民出版社、1994年、1-5頁)。

張作霖の略歴は次の通り(渋谷由里『馬賊で見た「満洲」張作霖のあゆんだ道』講談社、2004年、6-7頁の年表による。一部省略と加筆)。

1875年 現在の遼寧省海城縣に生まれる。

94-95年 日清戦争に参加。

96年 はじめて匪賊団に参加、脱退後、「保険隊」を結成。

1900年 「保険区」27ヶ村、配下50名に。

01年 金寿山に攻撃され八角台に逃亡、長男学良誕生。

02年 新民府に帰順・配下250名。

04-05年 日露戦争に参加。

11年 辛亥革命勃発により奉天省城へ移駐。

12年 革命指導者・張榕を暗殺、陸軍第27師団長兼陸軍中將となる。

16年 段芝貴を追放・張作霖政権発足。

22年 第1次奉直戦争に敗北。

23年 東北大学開校(初代学長・王永江)。

24年 第2次奉直戦争に勝利、反奉戦争勃発。

25年 郭松齡事件。

26年 安国軍総司令に就任。北京政府に君臨。

27年 山本-張協定締結。

28年 北伐軍の追撃から逃れるために北京を脱出。途中、皇姑屯で関東軍の河本大作らにより爆殺される。後継者張学良。

張作霖爆殺事件とその前後の内外情勢の詳細については、すでに検討したので、ここでは省略する。(儀我「1920年代の日中関係試論」『経済学論叢』〈中央大学〉第41巻第6号、2001年3月、「張作霖爆殺事件の真相」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第42号、2008年3月、「張作霖大元帥と日本」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第43号、2009年3月、など参照)。

張家三代の歴史を概観した古野直也『張家三代の興亡、孝文・作霖・学良の見果てぬ夢』

(芙蓉書房出版 1999年)は、ハワイにおける張学良と著者との会談内容(1998年9月)を含むことから注目されるが、張学良の祖父の名が孝文とされている。前述の張有財と張孝文のいずれが正しいかなど、検討課題としたい。

1928(昭和3)年6月4日の張作霖爆殺事件において、張作霖の爆殺そのものについては「成功」し、陸軍内の長州閥の巨頭である田中義一首相の失脚をもたらしたことも、当時の「反長州派」にとっての「成果」とされる可能性はある。しかし、武力による満洲制圧、日本の支配力の強化という基本目的は、完全に失敗した。張作霖の後継者張学良が、日本政府の阻止を振り切って「易幟」を断行(1928年12月29日)、さらに、「満洲事変」にいたるまで、抗日的姿勢をとり続けるという状況が生まれ、その意味では、張作霖爆殺は、逆効果を生むという「大失敗」であった。この失敗を出発点として、満蒙の武力制圧の成功を目指したのが1931年9月18日開始の「満洲事変」(中国では「九・一八事変」)である。張作霖爆殺事件(1928年)と「満洲事変」(1931年)との継続性と共通性は、次の各項目によって明らかである。

① 主役－両事件とも関東軍である。

両事件の主役は次の人物である。

関東軍司令官 高級参謀 参謀など

28年 村岡長太郎 河本 大作

東宮 鉄男

31年 本庄 繁 板垣征四郎

石原 莞爾

この顔ぶれを見れば、驚くべき関係が明らかである。28年の村岡司令官は、張作霖暗殺の意向をもっていたが、31年の本庄司令官は、事変の首謀者ではない。関東軍内部でも、中堅将校板垣と石原の「下克上」的動きが強まったのである。また、河本大作に対す

る処分が遅れていたことから、河本の後任が板垣であり、2つの事件の主役は、直接にバトンタッチされている。しかも、河本は板垣に次の事件を起こすための重要な忠告を与えている。

『軍人が何か行動を起こす場合に、民間人を使ってはならぬ。特に満洲浪人と自称する徒輩は使ってはならぬ』と懇々と語ったという(根津司郎『昭和天皇は知らなかった』早稲田大学出版部、1991年、102頁)。

28年の張作霖爆殺事件の河本大作と東宮鉄男は「満洲事変」の結果としての「満洲国」において、関東大震災(1923)の際の甘粕事件の主役甘粕正彦とともに要職に就き、両事件を貫く人的な連続性は一目瞭然である。なお土肥原賢二(1883-1948)が両事件に深く関与していたことも、周知のとおりである。

② 方法－両事件とも、鉄道の謀略的爆破を起点として軍事作戦の展開へ(28年は未遂)。

③ 目的－両事件とも、「東方会議」(1927年6月27日-7月7日)の線に沿った満蒙の軍事的・政治的支配。

④ 結果ないし歴史的効果－両事件に共通の面が大である。

A. 関東軍独走・軍部の独走の促進。

B. 暗殺・クーデター続発の起爆剤的役割＝首謀者の「免罪」から「英雄視」・栄転など。

C. 大正デモクラシー、昭和初期のマルクス主義などへの弾圧の強化。「三・一五事件」、山本宣治暗殺、治安維持法改悪、小林多喜二虐殺等々。

D. 支配体制内における「下克上」、政党政治の崩壊。

E. 国際的孤立から対中米英蘭戦争の敗戦にいたる「進路」の確定(32年10月リットン報告書、32年2月国際連盟脱退、39年5

月ノモンハン事件など)。

Ⅲ 張学良の2つの「9月18日」

張学良政権は、1928年12月、日本側の妨害を振り切って、蒋介石指導の国民政府との統合に成功した(易幟)。その後、日本政府が数多くの懸案の解決を要求しても、「その件は国民政府が取扱う」「国民政府の指示を得てから回答する」などという形で処理されることが多く、懸案は山積した。1929(昭和4)年1月、張学良は、多年にわたる政敵楊宇霆と常蔭槐の肅清を断行し、その結果、張学良の威信は大いに高まった(詳細は、儀我「1929年1月における張学良少帥」『経営情報学部論集(浜松大学)』第11巻第1号、1998年6月、参照)。

1930年、蒋介石の国民政府(南京)は、「反蒋介石連合軍」を結成した閻錫山・馮玉祥・李宗仁その他に脅かされ、4月から、大規模な「中原大戦」が始まり、参戦兵力100万人以上、死傷将兵約30万人とも言われる凄惨苛烈な決戦となった。(日本の関ヶ原の戦い・1600年を連想する)。

形勢を注目し熟慮していた張学良は、9月18日、「内戦の中止と国内の統一」を訴える声明を発表するとともに、強大な東北軍を率いて蒋介石支援の軍事行動を開始した。その結果、反蒋介石軍は敗北し、瓦解した。傅紅霖は、「1930年9月18日は、張学良の政治生涯のなかで最も輝かしい頂点であった」と位置づけている。

確かに、この功績によって、張学良は蒋介石に厚遇され、30歳の若さで、中華民国陸海空軍副司令に任命された。ただし、この時、東北軍の精鋭約11万人が関内に入ったため、東三省の軍勢力が低下し、関東軍に乗じる機会を与えたという側面もあるが、当時の張学良が得意絶頂であったとしても、不思議ではない。

関東軍の石原莞爾・板垣征四郎は、張学良政権のもとで、日本側が不利となった状況の大転換を目指して、日本政府の承認を得ないまま、まさに独断的(下克上)的に1931年9月18日、「柳条湖事件」によって「満洲事変」の火蓋を切った。河本末守中尉が、柳条湖で、満鉄線路のごく一部分を爆破し、それが中国側の攻撃であると偽って、東北軍北大営への攻撃を開始した。またしても、鉄道を利用した謀略である。

1930年9月18日は、張学良が一挙に栄光を獲得した記念日である。わずか1年後の1931年9月18日は、関東軍と朝鮮駐留日本軍によって東北軍が「撃破」され、張学良が「不抵抗將軍」と批判される暗転への記念日である。この2つの「9月18日」は、まさに、張学良の生涯の「画期」となる。ちなみに、蒋介石は、1931年9月18日以後も、剿共(共産党掃討作戦)を優先する「安内攘外」路線をとり続け、張学良に援軍を送ることもなく、張学良を失望させた。満洲における張学良政権は、1928年から31年までの約3年間の短命であった。

Ⅳ 「満洲事変」と張学良

1931年(昭和6)年9月18日の「満洲事変」は、周到に準備されていた。

関東軍は、「満洲」を占拠するために、世論づくりや政治的画策、軍需物資の調達など準備を行うとともに、「柳条湖事件」を計画し実行した。その具体的項目は次のとおりである(易顕石・張徳良・陳崇橋・李鴻鈞『九・一八事変史』早川正訳、新時代社、1986年、180頁以下)。

- ① 緒戦地区の選択。瀋陽(奉天)が選ばれ、柳条湖が爆破地点とされた。
- ② 「事変」を起こす時期の選択。第1に、鉄道をめぐる懸案事項の停滞、第2に万宝山事件の処理、第3に中村震太郎大尉殺害事件の

処理などを「事変」発動の契機にしようとした。

- ③ 「事変」を起こす陰謀グループの組織づくり。1929年5月、板垣征四郎大佐が関東軍高級参謀に任命されると、彼は、石原莞爾、花谷正らとともに陰謀グループを結成し、協力者の人選に着手した。柳条湖の爆破の担当者としては、張学良顧問柴山兼四郎少佐の補佐官今田新太郎大尉とし、爆破実施者は工兵出身の河本末守中尉を選んだ。次に、北大營と瀋陽城攻撃の秘密班5人も結成された。さらに、朝鮮駐屯日本軍の協力を得るための工作も進められ、軍部の中枢にも、秘密グループを組織した（橋本欣五郎、根本博、建川美次、重藤千秋、永田鉄山、小磯国昭、二宮治重など）。また、「民間」右翼団体の「満洲青年連盟」、「大雄峰会」、「仏教青年会」などの協力を得る工作も進められた。
- ④ 軍隊と将官の移動配備による「事変」の準備。京都の第16師団に代えて、仙台の第2師団を東北に駐屯させ、本庄繁中将を関東軍司令官に、建川美次少将を参謀本部作戦部長、土肥原賢二大佐を奉天特務機関長とするなど、一連の人事異動が行われた。
- ⑤ 朝鮮駐屯日本軍の越境準備。渡河越境の軍事演習など、東北での軍事行動に備えていた。
- ⑥ 張学良に対する牽制。関内に、閻錫山、石友三、韓復榘による「反張学良同盟」を結成させ、張学良の影響力を弱めようとした。
- ⑦ 関東軍は、瀋陽城攻撃の重砲を配備。
- ⑧ 日本軍の軍事演習。—1930年10月から31年7月までに50回以上の軍事演習を行ない、31年9月2日と3日にも、北大營付近での野外演習、9月4日と5日には東北兵器工廠の包圍攻撃と瀋陽城の攻撃演習を実施した。その後も、演習を繰返して「事変」に備えた。
- ⑨ 「参謀旅行」。参謀将校の視察を名目とし

て中国側の軍事偵察を行ない新しい「行動計画」を固めた。

- ⑩ 本庄繁の視察。「事変」の直前、関東軍司令官本庄繁は、9月7日から18日の午後まで、第2師団と独立守備隊の「検閲」を行なった。この視察は「戦前動員」であったとも見られる。

1931年9月中旬、「柳条湖事件」の計画が日本国内で暴露された幣原外相の閣議での質問が行われたため、9月18日、予定を繰り上げて、柳条湖の満鉄鉄道が爆破され、「満洲事変」が始まったのである。

ここで、「満洲」侵略のための世論づくりとその効果に注目しよう。

第1は、中国の東北における主権を否認し、日本の満蒙に対する重大な貢献を強調するものである。田中内閣の外務次官となった森恪（もりつとむ）の次の論説が典型的である。

「日本が20億の国幣を費やし、15万同胞の血を以て、漸くロシアの勢力を、日本の生命線であり、満洲人の棲家である満洲から払い除け、武力的封鎖政策に代ふるに、平和的開発政策をとり、加ふるに経済施設を満洲の地に行った」（山浦寛一『森恪』705頁－『九・一八事変史』前出、134頁より再引）。

第2は、「満蒙」は日本との特殊な関係にあって、日本の「生命線」であると言明するものである。松岡洋右は、「……満蒙はわが国の国防上のみならず、経済的に見てもわが国の生命線ともいふべきものとなっているのである」と述べている（栗屋憲太郎『ドキュメント昭和史』2、67-68頁、『九・一八事変史』前出135-136頁より再引）。板垣征四郎も活発にこの種の世論づくりに努めていた。陸軍の高級参謀の多くも、同じように活動した。

第3に、「満洲」の武装占領が鼓吹された。板垣征四郎や参謀本部の影佐禎昭その他も、公

然と、中国に対する武力使用を主張していた。
 (『九・一八事変史』前出136-137頁)。

1929(昭和4)年10月開始の世界恐慌の中で、日本の恐慌は、都市と農村のいたるところに深刻な悲劇を生み出していた。その克服のための「満蒙への進出」が、難局打開の活路とされ、「満洲事変」と「満洲国」建設の世論づくりが受け入れられやすい経済的・政治的背景となっていたのである。

張学良は、民政党若槻内閣の幣原喜重郎外相の対中国政策、国際連盟の対日批判などを重視していたので、「柳条湖」から全満洲への戦火の拡大を予想していなかった。

9月18日、張学良は北京(北平)滞在中で、全く、不意を衝かれた。その頃、張学良の辺防東北軍は44万人の規模であったが、学良は、その主力11万人を率いて関内に出動中であり、石原・板垣は、これを好機として軍事行動に出たのである。

張学良は語った。「当時私は、病氣療養のため北京にいました。満洲事変の報告を受けたのは、イギリス大使を招いて、梅蘭芳の芝居を鑑賞していたときでした。知らせを受け、すぐに自宅に帰り、抵抗するなという指示を部下に出しました。」(『張学良の昭和史最後の証言』前出、120頁)。

関東軍は、奉天軍の不抵抗の政策に乗じて、9月19日中に、奉天、長春、営口など満鉄沿線都市を占領した。若槻礼次郎民政党内閣は、事件の不拡大方針を決定して、本庄繁司令官に伝えたが、石原・板垣らはこれに従わず、21日には吉林に出兵した。林銑十郎朝鮮軍司令官は、独断で混成第39旅団を、越境して奉天に向かわせた。これは、明らかに大権干犯の重大犯罪であるが、若槻内閣は、閣議で事後承認してしまった。天皇も、この軍事行動を追認した。(同上、122-123頁)。

関東軍は、10月8日錦州爆撃、11月19日にはチチハルを占領した。翌年1月3日には錦州、2月5日にはハルビンを占領した。錦州爆撃は、一般市民をも殺傷し、無差別爆撃の先例となった。

蒋介石から張学良への指示は「相応処理」すなわち適当に処理せよというものであり、中央政府は責任を負わないことを意味する。

張学良は、事件の拡大は日本自体にとって国際的に不利と考え、拡大するとは予想していなかった。「私自身が事件を拡大したくなかったから、不抵抗の政策を取ったのです。……当時、日本が総がかりで攻めてくるとは思えなかったのです。日本の軍部の挑発に乗って、事件を拡大してはいけないと判断したのです」(同上、206頁)。勿論、張学良は、馬占山に対する支持をはじめ、各地のレジスタンス的対日反撃を続けていたが、「満洲国」建設を阻止するまでにはいたらなかった。

V 「満洲帝国」の「理想」と現実

ここで、「満洲国」の「理想」と現実について、問題点のいくつかを列挙しておこう。

(1) 理想ないし建て前

五族協和・王道楽土と日満一体化・日本化「満洲国」の理想とした「五族協和」は、日・朝・満・漢・蒙の「協和」である。ところで、1937(昭和12)年末の総人口は3667万人であり、漢族が2973万人と圧倒的に多く、全体の81%を占め、満洲族が437万人で12%を占め、蒙古族98万人、朝鮮族93万人、日本人42万人であった。「この民族構成を一皮むけば、少数の日本人を頂点に、圧倒的多数の漢族を底辺に作られたピラミッド支配構造で、各民族相互の交流は非常に少なかった。つまり『五族協

和』とは名ばかりで、実態は五民族が住み分けていた、というのが実情に近かった」(小林英夫『満洲の歴史』(講談社現代新書、2008年、210頁)。

「協和」の実態は、満蒙開拓団の定着を主目的として組織的に募集された「大陸の花嫁」について、『女子拓殖指導者提要』の中で、新しく、「民族資源の量的確保と共に大和民族の純血を保持すること」などが強調されていることにも、鋭く示されている。その際、ヒトラーのいわゆるゲルマン民族の「純血」主義まで例にあげて強調しているのである(小川津根子『祖国よ「中国残留婦人」の半世紀』(岩波新書、1995年、126-127頁による)。

ちなみに、1945年の敗戦時には、日本人約155万人(内開拓団関係27万人)となっている。

なお、孫文の唱えた「五族協和」(漢・清・蒙〈モンゴル〉・回〈ウイグル〉・蔵〈チベット〉)は、彼の主張のなかで過渡的なものと位置づけられるのであり、現在の中国における56民族から成る「中華民族」の形成との関連が注目される(儀我「多民族国家としての中華人民共和国」専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第41号、2007年3月参照)。

日満一体化は、「満洲帝国」皇帝溥儀が、建国神廟(三種の神器の模造品安置)の建設を実行し、各地方に「神社」が建設されたことにも示されている。また、溥儀皇帝と昭和天皇との「友好関係」の強化、溥儀の弟溥傑と嵯峨侯爵家の浩との結婚なども、日満一体化、満洲国の「日本化」政策の一環である。

(2) 現実の姿

では、「満洲国」の現実はどうのようものであったか。その役割は、次のとおり。

- ① 対ソ連軍事基地(関特演、ノモンハン事件など)

- ② 中国本土への軍事的・政治的侵攻拠点(華北分離工作など)

- ③ 鉄鋼・石炭・農産物(大豆三品など)の対日供給基地(満鉄と満洲重工業、大倉財閥と各財閥系商社の活動など)

- ④ 日本農村の「過剰人口」の受け皿(満蒙開拓団と青少年開拓義勇軍の大量移住とそれに見合う「大陸の花嫁」の大量移住)。

五族のうち日本人の比重増大の「大計画」

1945年8月9日のソ連軍の対日攻撃と46年以降の国共内戦のなかで、日本人にとっての「王道楽土」の状況は一変し、死亡した日本人17万6000人(その内、開拓団関係7万8500人)、そして根こそぎ軍事動員された男子約60万人はシベリア抑留、残留婦人も辛酸をなめ尽くすという状況に追いやられた(白井久也「明治以降の大陸侵略がもたらした災厄 日本人捕虜のシベリア抑留とは何か」、小川津根子「中国残留婦人・残留孤児はなぜ生まれたか」、小俣光子『『鳥雲』の森一日中の架け橋になった中国残留孤児」、羽田澄子「敗戦後の大連でのあれこれ」、以上いずれも『あごろ』311号(2007年4/5月合併号所収)。

他方、「満洲国」で支配的役割を担った人々の多くは、東条英機、星野直樹、松岡洋右、岸信介、鮎川義介のいわゆる「ニキ三スケ」をはじめ、その後日本本土で「国家総力戦体制」と「太平洋戦争」への道で主役を演じ、岸信介にいたっては、敗戦後の日本で重要な役割を果たした。「満洲国」体制が、日本全体に大きな多面的影響をもたらしたことを見逃してはならない。

Ⅵ 西安事変をめぐる

コミンテルンの方針転換と西安事変

コミンテルン(第3インターナショナル)は、

ロシア10月革命2年後の1919（大正8）年に結成された。第1インターナショナル（1864年創立）は、1876年解散。1889年創立の第2インターナショナルが、第1次世界大戦の際に、戦争支持派、平和派、革命派などに分裂したなかで、レーニン指導のコミンテルンが創立されたのである。ロシア共産党を中心に、各国共産党を支部とする国際組織であり、第2インターナショナルと異なり、植民地地域でも積極的に活動した。1919年から中国革命を支援し、1920年には中国共産党が結成され、翌1921年には、日本共産党が結成された。

1930年代のファシズム台頭の時期に、スターリン指導のコミンテルンでは、ファシズム勢力と社会民主主義勢力に打撃を加える方針が続けられていたが、西安事変の1年前の1935年の第7回大会からは、反ファシ統一戦線・人民戦線戦術に転換した。1935年8月の中国共産党の抗日救国を訴える「8.1宣言」も、コミンテルンの方針にもとづいている。

1936年には、スペインとフランスで人民戦線政権が成立。同年12月12日には、中国で西安事変が起こり、抗日民族統一戦線結成を目指す、労働者・農民・都市中産階級・知識人学生などの提携と第2次国共合作への道が切りひらかれたのである。

日本帝国主義の華北侵略への抵抗

1933年5月、関東軍と中国国民政府軍との間で「塘沽停戦協定」が結ばれた。1932年7月から関東軍は内蒙古熱河省に侵攻、長城以南に進出した。蒋介石は、対中国共産党作戦に重点をおき、対日和平策をとっていたので、長城以南に非武装地帯を設定して両軍が撤退し、中国警察が同地域の治安維持に当たることなどを協定。中国は、日本の「満洲」支配を事実上黙認したとみられた。

1935年、塘沽非武装地帯での抗日テロ事件を契機に、支那駐屯軍は、国民党機関と国民政府中央軍の河北省からの撤退、同省主席于学忠の罷免を要求し、6月、「梅津・何応欽協定」によってこれを認めさせた。さらに、同月末には、関東軍が、「土肥原・秦徳純協定」によって、察哈爾省内からの国民党機関と宋哲元軍の撤退を取り決めた。華北5省（察哈爾・綏遠・河北・山東・山西）を、第2の「満洲国」化しようとする動きであり、アヘンの密貿易自由化を含む経済圏の支配と対ソ戦略の強化をも目指すものであった。

同年11月には、殷汝耕首班の翼東政権が生まれ、12月には、冀察政務委員会（宋哲元委員長）が成立。さらには、日本軍特務機関が資金と武器を支給する「自治」運動も続出した。華北を中国本土から分離させ、日本の実質的支配下におく政治工作である。1936年5月には、関東軍内モンゴル「独立」工作により、「徳王」主席の「内蒙軍政府」もつくられた。

このような日本帝国主義の華北侵略に抵抗して、1935年12月9日、まず北平（北京）の学生たちが決起した。「日本帝国主義打倒」「華北自治反対」などのスローガンを掲げるデモ隊の中心は、北平に移転して学習していた東北大学の学生たちであった。「12.9青年学生愛国運動」は、「北平市学生救国連合会」の指導によって生まれたのであるが、この略称「北平市学連」の源流は、「東北大学水災賑済会」であった。1935年、山東省で黄河の堤防が6ヵ所で決潰、500万人が洪水の被害に苦しんでいたため、当局も、東北大学の組織を取締ることができなかった。12月9日のデモの際には、東北大学学生が最も多く参加し、最前列で行進した。北京大学を通過する時には6～7000人の隊伍のデモ行進となった。王府井大街で、当局の暴力的弾圧が加えられたが、学生たちは屈しなかった。

さらに、12月16日の「翼察政務委員会」成立予定日には、再び1万人余の学生がデモ行進を敢行し、市民数万人が参加する民衆大会も開かれて、抗日運動は、全国に波及した。北平当局に逮捕されていた学生は張学良学長の尽力によってすべて釈放された。

翌1936年5月には、全国の抗日・救国の組織60余を結集した「全国各界救国連合会」が誕生し、「内戦停止、一致抗日」を要求する。

蒋介石主導の国民党政権は、1936年2月、「治安維持緊急治罪法」によって抗日運動をきびしく弾圧し、西安事変直前の11月には、沈鈞儒、章乃器など、「全国各界救国連合会」の指導者7人を逮捕した。

張学良と蒋介石との政治路線の違いはますます鮮明なものとなる。

次のように、張学良は蒋介石に絶大な期待を寄せていたが、その信頼は崩れ、両者の対立が最も先鋭化する共産党・紅軍掃討の役職に任ぜられたのである。

張学良は、1933年4月から、ムッソリーニの女婿チアノ伯と同行して訪欧、イタリアでのファシズムの実情から大きな影響を受け、同年1月政権を獲得したヒトラーとのとの面会も予定していたが果たせなかった。1934年1月、張学良は元気を取戻して帰国し、「中国においても首領を擁護せよ」と主張していた。首領とは、蒋介石であり、蒋介石をムッソリーニのような強い指導者にしたいと望んでいたのである。

帰国後の張学良は、蒋介石の侍従室の主任になることを希望したが、蒋介石は承認しなかった。

「〔蒋介石に〕選ぶようにいわれて仕方なくいちばん難しい共産党との戦いを選んだのです。しかし実際には共産党と戦いたくはありませんでした。私は中国人同士が殺しあう内戦を嫌悪していたのです」（『張学良の昭和史最後の証

言』前出、162頁）。

1935年9月、蒋介石は、西安に西北剿匪総司令部を設け、10月、すでに東北軍の一部を西安に移していた張学良を西北剿匪副司令任命した。

東北軍は、量質ともに強大であった。

東北軍全盛の頃、将兵約30万人、しかも、東北の人々は身体が大きく、体質も強壮、装備も優れていた。とくに砲兵、空軍の力量は抜群であり、300機の軍用機を擁して、国内最高の軍事力を備えていた。張作霖政権期（1916〔大正5〕-1928〔昭和3〕）の1917年5月に、王永江が財政庁長に就任し、奉天省の財政改革に取り組んだが、王永江の軍事費削減の意向にもかかわらず、軍事費は膨張した。「確かに後年の統計によれば、1918年に歳出全体の約69パーセントであった陸軍費は少しずつ比率を高め、22年には80パーセント弱となっている」（澁谷由里『馬賊で見る「満洲」 張作霖のあゆんだ道』講談社、2004年、129頁）。「満洲」における兵器生産と兵器の輸入は、張作霖政権下で、高水準を保っていたのである。

しかし、1931年の「満洲事変」の後、国民政府による東北軍の給与・待遇は、中央軍の8割に切り下げられた。しかも、国民政府の命令による共産党軍との戦闘は連戦連敗、死傷者と捕虜が続出したため、兵員は13万人にまで減少した。かつて、東北軍の文官・武将ともに生活は豊かであったが、貧しい農村に駐留することになり、蒋介石のお目付役晏道剛が、東北軍の欠点を指導し、公然と張学良の責任を問うような状況のなかで、東北軍の将兵は、蒋介石・国民政府に対する不満を募らせていた。そのような東北軍に対して、共産党側は、捕虜を待遇しながら、「内戦停止・一致抗日」を呼びかけたので、故郷を奪われた東北軍内部で共感が広がっていった。

1935年6月の「梅津・何応欽協定」、「土肥原・秦徳純協定」の内容によって屈辱を痛感した張学良は、蒋介石の対日譲歩政策に疑問と不満を抱き始めた。同年12月、上海で杜重遠と会い、共産党の「8.1宣言」を知り、共産党と紅軍の歴史を研究、帰還した捕虜の話から、共産党地区の実情についてもしだいに理解するにいたった。

張学良指揮下の東北軍は、共産党軍との戦闘で連戦連敗、西安に移って後、師団長2名が戦死するような苦戦続きであった。捕虜となった東北軍将兵の多くは自発的に共産党軍に参加し、戻ってきた捕虜も、「内戦反対、一致抗日」を主張する。

張学良は、部下から「あなたは父上の仇を忘れ、抗日の大義をかえりみず、上官〔蒋介石〕に盲目的に服従して、自分の禄位を求めているだけだ」と痛烈に批判された。

共産党との対立関係の平和的解決を図ろうと考えはじめた張学良は、上海、洛川で共産党とひそかに接触、ついに1936年4月9日には、自ら飛行機で延安に向かい、カトリック教会の中で、周恩来と直接会談するに至った。両者の意見は「内戦停止」では完全に一致した。しかし、当時の共産党は「反蒋抗日」路線であり、張学良の考えは「連蒋抗日」であり、蒋介石対策については、不一致の状況もあった。この問題点は、5月12日の第2回会議際に、共産党側が、「逼蒋抗日」（蒋介石に抗日をせまる）路線に転換したことで解決可能となり、紅軍の国民軍への編入など、10項目の協定ができ上がったのである。

1936年10月30日、張学良は、蒋介石に周恩来との会談を打ち明けることができないまま、閻錫山とともに、洛陽で「内戦停止、一致抗日」の意見を具申したが、蔣は怒るだけであった。一方、張学良は、西北軍の指導者楊虎城と

会談し、「内戦停止、一致抗日」について協力を得たが、その際、楊は、「兵諫」を示唆したのである。

同年12月2日、洛陽で、張学良は再び蒋介石に意見を具申するが、蔣は激怒した。12月4日、蔣は督戦のために西安に赴き、7日に、張学良は西安近郊の華清池で蔣と激論となり、対立は決定的となった。続く12月9日は、前年の「12.9青年学生愛国運動」の1周年に当たり、東北大学の学生をはじめ、1万人以上の学生が「内戦停止、一致抗日」の要求をかかげてデモを行い、蒋介石に直訴して回答を求めようとした。デモ隊は徒歩で、臨潼を目指して前進したが、国民党は学生を迎え撃つ態勢を整え、流血の惨事が予想される緊迫した事態となった。駆けつけた張学良は学生のデモに対して、決定的な発言をした。デモの最前列には、張学良が学長である東北大学の学生が並んでいた。張学良は熱烈に語った。

「諸君、臨潼はまだ遠い。諸君の請願書は私に渡し給え。私が蒋介石委員長に話しする。私は諸君の愛国的行動に反対しない。しかし政府は学生が国事に関与することを許さないの、流血事件が起り得る。諸君の要求は、私の要求である。諸君の要求に対して、私は、一週間以内に事実をもって回答する。どうか私・張学良を信じてほしい」。学生たちは深く感動し、整然と帰校し、流血事件は回避された。

蒋介石は、この事件について大いに不満であり、「無知な学生に対しては、発砲があるだけだ」と語った。張学良は、この一言に激怒し、「兵諫」への決意を固めた（丁曉春・魏向前編『張学良與東北大学』東北大学出版社、2003年、114頁以下）。1935年の「12.9」運動においても、北平で勉学中の東北大学学生は、きわめて大きな役割を果たしたのであり、抗日統一戦線結成を要求する東北大学張学良学長と東北大学学生

とは、同じ志を抱いて行動したのである（同上、86頁）。

ちなみに張作霖は、自らの「無学」を自覚し、その子息の名には学良、学銘など、すべて「学」の字を用いるほど教育熱心であり、1923年4月、日本側の「大学不要論」を排して、東北大学を創設したのである。初代学長は奉天省省長王永江であり、1927年就任の第2代学長は劉尚清（奉天省省長）であったが、張作霖爆殺事件直後の1928年8月には、張学良が、第3代学長となり、1936年12月の西安事変の際にも、学長職に在った。1930年、東北大学は、300名の教員、3000名の学生を擁する国内最大級の大学となっていた。（北京大学の学生数は約2000名であった）。

1936年10月、蒋介石は、東北軍の士気を高めるために西安に赴いた。ところが、東北軍と楊虎城が率いる西北軍の中堅将校たちは、蒋介石の「先安内・後攘外」という共産党掃討優先の政策に反対して、「内戦停止・統一抗日」を訴え、また、東北軍の整備と待遇を中央軍と同じにし、戦死者の遺族を救援することなどを要求した。

蒋介石は、「東北軍頼むに足らず」と知り、東北軍を福建に移し、代りに30万人の軍隊と100機の軍用機を集める計画を開始した。このことは、共産党鎮圧政策の強化にとどまらず、東北軍への懲罰、張学良への警告であった。

顧みれば、蒋介石と張学良は、長らく、家族ぐるみの親交を結んでいた。①1928年12月「易幟」による国民政府の全国統一、②1930年9月の、「中原大戦」における張学良の蒋介石支持などは、蒋介石に対する絶大な貢献であった。しかし、蒋介石は、内戦優先の立場に固執して、張学良の提言を拒け続けた。

1936年12月4日、蒋介石は再び西安に赴き、共産党・紅軍絶滅の最終決戦態勢をととのえ、

東北軍・西北軍を督戦するために、陳誠・衛文煌など多くの軍首脳を招集した。蔣は、東北軍の首脳部と集団的に面談することはせず、ひとりひとりに会って、自説を受け入れさせようとした。しかし、反論される。12月7日、蔣と張は、3時間も激論する。9日には、学生が大規模のデモを行い、「一致抗日」を要求して、蒋介石に「直訴」しようとする。張学良は学生を擁護し、学生に対して自らの決意を述べる。

このような緊迫した状況のなかで、12月10日、蒋介石主導の会議で、張学良の現職を解任し、東北軍とともに福建に移動させることを決定。これによって、中央軍が主力となる。11日夜の蔣張会談のさいも蔣は張の提言を拒否する。

これらの情勢によって、張学良と楊虎城は、「先んずれば人を制す」と決心し、12月12日早朝、周知の「兵諫」作戦が決行されたのである（傅虹霖『張学良與西安事變』利文出版社、1989年、173頁以下による）。

張学良・楊虎城による蒋介石拘留は中国内外に多様な反応を呼び起こした。

国民党・国民政府内部では、何応欽が、「蒋介石は殺害された。張学良・楊虎城を討伐せよ」と主張し、西安への空爆と地上攻撃を準備した。実現すれば、長期・大規模の内戦となり、日本の支配層が「漁夫の利」を得ることとなる日本政府は、南京政府に、「強硬策」をとるよう働きかけていた。

国民党内でも、宋美齡・宋子文・孔祥照その他が、張・楊との平和的交渉を要求した。12月14日、張学良とも親密な関係にあるオーストラリア人ドナルド（蒋介石の顧問）が西安に赴き、16日以降、宋美齡と宋子文が、危険を冒して西安で交渉に当たった。

蒋介石の強硬な態度にも微妙な変化が生まれた。

12月16日、討伐軍総司令官に任命された何応欽は、西安総攻撃の準備を整えたが、西安に到着した宋美齡によって、攻撃は阻止された。

宋美齡の西安到着後、張学良は、楊虎城の反対を押し切って、蒋介石の釈放を決定するにたった。

スターリンは、蒋介石の釈放を、中国共産党に指示した。汪精衛がベルリンでヒトラーと会談し、汪精衛が蒋介石に代わって国民党の指導的地位を占めようとしたことを知ったのである。17日に西安に到着し、張・楊両將軍の熱烈な歓迎を受けた周恩来一行に、スターリンの指示と中国共産党指導部の意向が伝えられた。スターリンは、南京政府が、親日的な汪精衛と何応欽の支配下に入ることを懸念していたのである。

共産党内にも、蒋介石の殺害を求める急進派と蒋介石を人質として南京政府に抗日を迫る穏健派などに別れていたが、周恩来は、「連蔣抗日」の方針で交渉に当たり、張学良の見解とも一致しながら、蒋介石の翻意の方向に進んだ。12月23日、西安、南京、共産党の代表が参加して正式会談が開かれ、蒋介石の釈放などが確定、24日に蒋介石と周恩来が会見した。

12月26日、蒋介石夫妻とドナルド、別の飛行機で張学良が、空路南京に到着、蒋介石は大歓迎を受けた。

なお、西安事変直後、各国で状況の把握が困難であったことは、小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』（岩波新書、1986年、159頁）に示されている。張学良・楊虎城連盟の全国への8項目の返電の内容は、ここでは省略する（同上、159頁）。

1937年7月7日の廬溝橋事件から、日中戦争は本格化し、日本軍は、中国全土に侵攻した。この事態の中で、同年9月には、第2次国共合作、抗日統一戦線結成が実現し、苦闘の末、1945年8月、中国は対日勝利の日を迎えた。し

かし、張学良は、西安事変以後、中国各地で軟禁状態に置かれ、対日参戦の希望は果たせなかったのである。

VII 張学良の人間模様

昭和天皇裕仁（1901-1989）と張学良（1901-2001）は同年齢であり、20世紀の歴史の主役であり、生証人である。

昭和天皇は、1923（大正12）年12月23日、摂政（皇太子）の時期に、難波大助によって虎ノ門付近で狙撃された。社会主義の影響を受けていた難波は、大逆事件（1910-11）や甘粕事件（1923）などに憤激して天皇暗殺を計画したのである。翌年死刑。山本権兵衛内閣は引責辞職（虎ノ門事件）。

1932年1月8日の桜田門事件も、昭和天皇暗殺未遂事件であり、朝鮮人土木労働者李奉昌が、天皇の車に手榴弾を投げたが失敗。李は大逆罪で死刑。犬養首相は辞表を提出したが天皇に慰留されて留任、同年の5月15日、「5.15事件」の際、青年将校によって射殺された。昭和天皇は、数多くの暗殺・クーデターと戦争を経験する。

張学良の父・張作霖（1875-1928）は、数回の戦場での危機と暗殺未遂事件を免れていたが、1928（昭和3）年6月4日、関東軍の列車爆破により死亡。

張学良が敬愛していた郭松齢が、1925年父・張作霖に対して軍事的反乱を起し、関東軍の介入によって、張作霖が政権を維持し得た「郭松齢事件」で、張学良自身、平重盛*以上にきわめて困難な立場におかれた。

※「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」の故事（校正者 壺岐一郎注）

逆に、1936（昭和11）年12月12日の「西安事変」においては、張学良が、上官に当たる蔣

介石に対する軍事クーデター〔兵諫〕を強行し、第2次国共合作・抗日統一戦線結成への道をひらくという歴史的役割を果たした。

このように、張学良もまた、数多くの暗殺・クーデターと戦争を経験する。

ところで、昭和天皇と張学良は、1921年秋、21歳（数え年、以下同じ）の時に、日本の宮中で面談している。訪日の案内をしたのは、本庄繁であった。張学良は、回顧して語る。

「昭和天皇、そう、当時はまだ皇太子でしたが、私はその皇太子殿下と間違えられたのです。／一度目は、軍事演習のときでした。長官のあとについて歩いていくと、軍楽隊が、皇太子と間違えて君が代を演奏したのです。／二度目は、皇居に行ったときでした。皇后陛下にお会いしました。会見が終わって、外で記帳しているとき、こんな話を聞きました。皇后陛下が、私の方を見て、『あの三番目にいる人は誰ですか』尋ねられたそうです。……私が、当時の皇太子そう、後の昭和天皇にととてもよく似ていたからなんです」（NHK取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1991・平成3年、18頁）。

ところで、張作霖は、唐の高祖と太宗の例を挙げて、張学良に、父と子で「大挙」を成し遂げることに、すなわち、作霖・学良の父子が「皇帝」となることを示唆したところ、学良は、「あなたの頭は古い。現在は封建時代ではありません。中国では再び皇帝など有り得ないのです」と反論した。作霖は、「それなら、裕仁に学べ」と説いたが、学良は、「裕仁から学ぶことはできません。私は、国家と民族にとって有益の人になる」と答えている（丁曉春・魏向前編『張学良與東北大学』東北大学出版社、2003年、76頁）。

その張学良は言う。

「〔日本軍の〕演習の他にも、日本は私に、兵

器庫や兵器工場も見せてくれました。私は一日見て、それが私への威しであることが分かりました。……ですから、この日本訪問が終わったとき、日本の印象は決してよくありませんでした」。帰国後、張学良は、日本軍にならって軍の近代化を行うことを父・張作霖に提案し、採用された。（『張学良の昭和史最後の証言』前出、39-40頁）。

張学良は、ラストエンペラー溥儀とも会談している。1912年の清朝滅亡の後、溥儀は、1937年の「満洲国」建国の直前まで、天津で生活していた。張学良が、「ある日天津のホテルで朝食をとっていると、溥儀が突然ひとりやってきました。……彼に『あなたの皇帝時代からの取り巻き連中を辞めさせたらどうですか。……どうです南開大学で勉強してみませんか？南開大学がいやなら、アメリカなどの外国で勉強されてはどうですか』と勧めました。そして、『あなたは元々皇帝の身分でしたが、これからはまじめな平民にならなければなりません。……あなたがいつまでもあの連中に取り囲まれていたら、将来は必ず彼らに利用されて、首を切られることになるでしょう』と忠告したのです」（『張学良の昭和史最後の証言』前出、142頁）。溥儀は、張学良の忠告に反して、「満洲国皇帝」となり、周知の悲劇的人生行路を辿った。「西安事変」（1936）の重要な主役となる張学良と周恩来（1898-1976）との最初の出合も運命的である。ここでも、奇しくも、南開大学が登場する。「私〔張学良〕は南開大学の学生のころに、周恩来の名前をすでに知っていました。それは政治家としてではなく、京劇がとてつもない学生として知っていたのです。彼は女形がとてつもない得意で、その演技は素晴らしいものでした。しかし当時は、これといった交際はありませんでした」（同上、175頁）。若き周恩来の女装写真は、武田雅哉『楊貴妃になりたがった男

たち』（講談社、2006 年）に収載されているので、張学良の絶賛の証明とすることができると思われる。（私事にわたるが、1963 年夏、北京で、私が会談の機会を得た周恩来総理の端正な風貌と軽やかな身のこなし、そして柔らかであたたかかった握手なども、昨日のこのように思い出される）。

張学良と儀我誠也顧問の信頼関係

張学良は、1990 年 12 月、NHK の磯村尚徳のインタビューの際に、「儀我〔誠也〕はどうしているか。私は儀我が好きだ」と発言したが、放映の過程では、時間の関係でカットされた。ともあれ、1929 年春の儀我顧問の帰国（任地広島）に当たって、張学良は自筆で惜別の詩 2 首を認めて贈呈したほど好意的であった。その理由として、いくつかのことが推定される。

- ① 張学良が、若き將軍として奉天派對直隸派の「奉直戦争」（第 1 次 1922 年、第 2 次 1924 年）など、前線で戦った時、特に第 2 次奉直戦争以後、儀我少佐も軍事顧問として同行し、戦闘の苦楽を共にしていたこと。前線での珍しい写真の多くが、現在も儀我家に保存中である。
- ② 張作霖の失脚を目ざした郭松齡反乱事件（1925 年）の際に、張学良と郭松齡との会談計画（実現せず）など困難な連絡の仕事を、張学良は、儀我少佐と守田福松医師に任せていた。儀我・守田は、難局の中でも、信頼されていたのである。
- ③ 張作霖爆殺事件（1928 年 6 月 4 日）の際に、張作霖と儀我誠也は至近距離に居て、同時に、生死存亡の危険にさらされた共通の被害者であったこと。ちなみに、同じく至近距離にいた呉俊陞（張作霖の有力な後継者の一人とも見られていた）は即死であった。

- ④ 1929 年 1 月にいたる張学良対楊宇霆の政争の際にも、儀我顧問は、張学良支持の側に立っていたこと。

- ⑤ 張学良も儀我誠也も、幼少のころから基督教に関心をもち、両者とも「モダン好み」で、いわゆる相性が良かったのかもしれない。

ちなみに、1990 年、90 歳の張学良は、本庄繁大將（1931 年 9 月 18 日の「満洲事变」開始時の関東軍司令官、後、昭和天皇の侍従武官長となり、敗戦後、剖腹自殺）に対する親愛の念と、土肥原賢二大將（元奉天特務機関長、張学良の軍事顧問、東京裁判により絞首刑）に対する強い反感の念を明示している（NHK 取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1991 年、79 頁以下、138 頁以下）。張学良は乃木將軍を尊敬し、NHK とのインタビューの際に、記憶する爾靈山（乃木希典作）の詩を便箋に書き誌したほどであるなど、人物に対する好き嫌いが、きわめて強いのである。

ところで、張作霖爆殺事件およびその後における日本陸軍の儀我少佐に対する評価は複雑であった。

- ① 張作霖爆殺事件の直後に、儀我少佐は、関東軍の犯行であると知りながら、「南方（蒋介石指揮の国民革命軍）の犯行である」と記者団に語った。日本の現役の将校が同乗している列車を、関東軍が爆破するはずはないとする関東軍のアリバイ作りと合わせて、二重に、日本側の犯行の否定に協力した形であるから、ひそかに高く「評価」されていた。
- ② 張作霖の死後、儀我少佐は、張学良の軍事顧問となり、信頼関係にありながら、日本側にとって不利となる張学良の「易幟」

(1928年12月)を思いとどまらせることができず、張学良の抗日的諸政策を阻止できなかった。また、張学良対楊宇霆の対立関係の中で、日本側の楊宇霆支持派から「白眼視」される側面もあった。

森島守人『暗殺・陰謀・軍刀』（岩波新書、1950年）によれば、「私は在満当時から嵯峨〔儀我〕と懇意にしていたが、昭和十二年華北事変発生後唐山で会見した折り、その後軍部の気受けはどうかと尋ねたところ、この頃ようやくお叱りも疑惑もとけたらしいと苦笑していた」（23頁）。すなわち、張学良との信頼関係が「災いしていた」可能性がある。ちなみに、1929年の儀我顧問の帰国後、後任は柴山兼四郎少佐（後に陸軍次官）であったが、1931年の「満洲事変」までの任務は、困難が多かったことと推測される。

Ⅷ 結 言

張学良は、2001年10月14日、ハワイで死去した。享年は数え年100歳である。その直前に、米国では、9.11同時テロが発生、その影響は全世界に及んだ。

張学良の100年の生涯は、まさに20世紀そのものと重なっている。張学良自身の重大な転機のいくつかを列挙して結びとする。

- ① 張学良は医師になりたかったが、父張作霖の強い要請で、軍人への道に進んだ。
- ② 1925年11月の郭松齡の張作霖に対する反乱は、張学良を極度に困難な立場に追い込んだが、辛うじて事態は収拾した。
- ③ 1928年6月4日、敬愛する父張作霖が突如死去、8月その後継者となる経過も多難であった。
- ④ 1928年12月29日、日本側の阻止を振り切る易幟によって多年の宿願である国内の

平和的統一を実現した。

- ⑤ 1929年1月10日、最大の政敵楊宇霆と常蔭槐を粛清。決断は困難であったが、結果は張政権にとって有利となった。
 - ⑥ 1930年9月18日、「中原戦争」に終止符を打ち、蒋介石の厚遇を受けた。30歳にして中華民国陸海空軍副司令となるなど。
 - ⑦ 1931年9月18日、「柳条湖事件」を発端として「満洲事変」が始まり、不抵抗の方針を採用したため敗北。「満洲国」建国となる。
 - ⑧ 1936年12月12日、西安事変の主演となり、第2次国共合作、抗日統一戦戦結成礎石を築いた。翌年7月7日、日中戦争本格化。
 - ⑨ 西安事変後、中国本土と台湾で54年にわたる軟禁生活を強いられ、対日参戦の希望は蒋介石に容れられなかった。
 - ⑩ 1990年6月1日、台湾の円山大飯店（宋美齡が経営）で90歳の生誕祝賀会が公然と大規模で行われ、本格的「自由」獲得。ハワイに移住して死去。中国本土の土を踏むことはないままであった。
- 張学良と日本との関係について歴史的に要約すれば、以下のとおりである。
- ① 第1次世界大戦中の、日本の大隈・板垣政権の「対華21カ条」の要求（1915）に対して、父・張作霖は烈しく反発した。当時14歳の張学良も、「21カ条」反対のデモに参加している。
 - ② 1921年の訪日の際の日本側の威圧的態度には、反感を抱いた。前述のとおりである。
 - ③ 張作霖政権の日本人政府顧問・軍事顧問の個々人について、また、関東軍、関東庁、満鉄・総領事館などにおける個々人に対する、好悪の感情は、はっきりしている。日

本国内の有力政治家床次竹二郎に対する資金援助なども、注目される。乃木将軍に対する敬愛の情も、本庄繁に対する親愛の情なども、率直に示されている。

- ④ 1928年6月4日の張作霖爆殺事件以後の対日感情とくに関東軍・日本陸軍に対する不倶戴天の感情は、当然である。田中義一政権の「易幟」阻止の動きに対する反感は、「易幟」の実行過程に示されたとおりである。
- ⑤ 「満洲事変」後の「不抵抗将軍」の汚名は、対日感情悪化の重要な要因である。
- ⑥ 「西安事変」は、東北軍・東北大学学生など身近な関係者の抗日運動に励まされながらの、張学良の全面的抗日の決定的実践であった。
- ⑦ しかし、「西安事変」後、日中戦争が本格化（1937年7月7日廬溝橋事件）する中で、軟禁状態の張学良自身の「参戦」の希望は蒋介石の反対によってかなえられなかった。
- ⑧ 1990年6月の張学良90歳の誕生祝賀会の直後、日本のNHKのインタビューに応じたことは、以上の歴史的経過から見て驚きの目で見られた。しかし、このこと自体、張学良の大乗的心境を証明している。